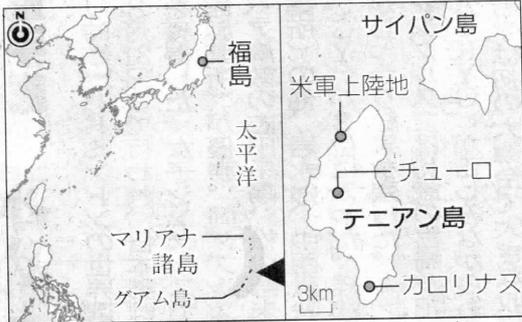


テニアン島の悲劇「伝えねば」

戦後80年

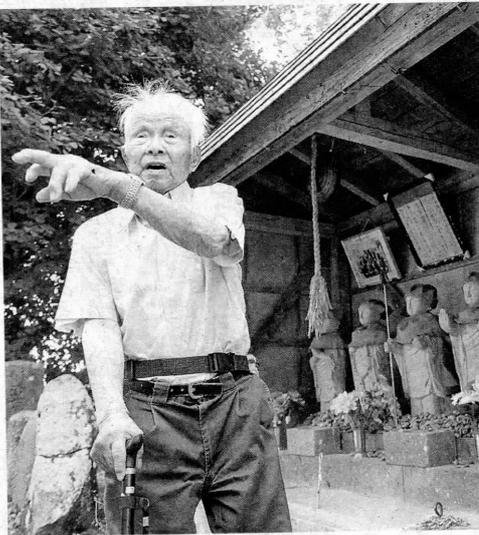
80年前の9月2日、日本は降伏文書に調印し第2次世界大戦が正式に終結した。ただ月日が流れても人々の脳裏に焼き付いた惨禍の記憶は消えない。「玉砕の島」と呼ばれたマリアナ諸島テニアン島の元島民伊藤久夫さん(90)は米軍上陸後の集団自決の際、妹2人が父により命を絶たれた。伊藤さんは「残酷な事実だが、不戦のため後世に伝えたい」と話している。



福島県会津坂下町の伊藤さんは生後すぐ一家でテニアンに渡った。「海や山の幸が豊富な楽園」だった。1944年に始まった米軍の空襲で状況は一変。攻撃は6月から激化、7月24日

集団自決 父に命絶たれた妹 90歳元島民 遺骨探し続ける

に米軍が島北部に上陸した。伊藤さんは両親、姉、妹2人の計6人で中部のチューロ口に暮らしていたが避難を促され26日夜に出発。翌日には南部のカロリナスに着き、密林の洞窟に身を隠した。計6家族31人が集まった洞窟はワンルームほどで、天井は座った大人の手が届くほどの低さだった。家族ごとに円くなり、自決用の手りゅう弾が



妹などを供養するため建てられた地蔵を訪れた伊藤久夫さん

一家に一個渡された。「天皇陛下万歳」。付近の洞窟から次々に叫び声が上がリ、自決の瞬間が迫る。その時、伊藤さんらの洞窟入り口で「デテコイ(出て来い)、デテコイ、カマワン(構わん)、カマワン」と米兵の声が聞こえた。「殺さないから投降しろ」との意味と思われるが、伊藤さん一家も「天皇陛下万歳」と叫び、



家族写真に写る幼少期の自分を指さす伊藤久夫さん=いずれも7月26日、福島県会津坂下町

父が手りゅう弾の信管を抜いた。ただ爆発は起きなかった。父は近くにあったまさかりのようなものを使い、洞窟内で手りゅう弾爆発後も即死できず苦しむ人々を次々に襲った。伊藤さんも頭をたたかれて気を失った。頭には今もへこみが残る。8歳と3歳の妹は父により命を絶たれた。両親と姉は生き延びたが妹2人の行方は分から